

教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	北海道大学	申請分野(系)	人社系
教育プログラムの名称	人文科学における実証的研究者の育成拠点		
主たる研究科・専攻名	文学研究科人間システム科学専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名, 研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者) 仲 真紀子		
<p>[教育プログラムの概要] 人間システム科学専攻は、心理システム科学、行動システム科学、社会システム科学、地域システム科学の4専修からなる。それぞれ認知心理学、社会心理学、社会学、地域・生態学をベースとしているが、専攻全体として、<u>人間・社会の問題に対し「実証的アプローチ」をとることができる能力の育成を目標としている</u>。「実証的アプローチ」がとれるということは、問題や対象を客観的な指標により観察・観測し、仮説を立て、実験や調査などの方法を用いて解決・解明に当たることができる、ということである。多様な領域の研究者や専門家と協力しながら、自他共に認める技能と自信をもって、現代的問題に対し実証的アプローチを進めるには、<u>学位取得が大前提となる</u>。</p> <p>現在、本専攻の学生は論文執筆や学会発表等においては活発に研究活動を行い、優秀な成績を修めている。しかし、博士学位を取得する者は3割である。個別の研究は遂行できても、それをまとめ、学位論文とすることができていない。このような現状の背景として、以下のような問題が指摘されている(昨年度「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の一環として行われた大学院生への面接調査より)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学位取得に必要な実証研究の質と量を、学生が明確なイメージをもって把握できていない。 ● 問題や手続が大規模化し、学生が主体的に研究を立案、遂行、完成させる機会が不足している。 ● 学位取得の達成に向けての、適切なフィードバックが不足している。 <p>問題の解決に向け、本プログラムでは、実証的アプローチの方法を明確に示し、習得をきめ細かにサポートできるように、実証的アプローチを(心理学、社会学、地域・環境学の領域によらず)「<u>ラボラトリ集中型</u>」「<u>サーベイ情報収集型</u>」「<u>フィールド調査型</u>」として定式化する。その上で①学位取得の<u>目標</u>となる研究の質・量を明示化し、②教員のサポートのもとで学生が<u>主体的に研究</u>を立案、遂行、発表できるプログラムをタイプごとに整備する。具体的には (a)<u>研究のスターター</u>(問題の発見、計画の立案、参加者/調査対象者/フィールドの確保・コンタクトの取り方、倫理的配慮、実験/調査/面接の第一日の標準ガイド等)を文書、DVD、教材作成配信システム<e-learning>等により提供し、(b)<u>データ解析</u>、(c)<u>国際発表・論文作成の指導・支援</u>を強化する。③また、学生による<u>主体的シンポジウム・ポスターセッション</u>を支援し、他研究者、院生との交流やフィードバックを得る機会を高める。これらの活動を④<u>支援チーム</u>(統計、英語、IT、教材作成配信支援)、⑤学位取得達成のための<u>フィードバック</u>体制、および⑥外部ピア研究者によるプログラム評価(<u>エクスターナル・イグザミナー</u>)により支える。</p>			

北海道大学：人文科学における実証的研究者の育成拠点

履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）

以下の概念図は博士前期および後期課程における学生の履修および研究遂行の流れを表している。

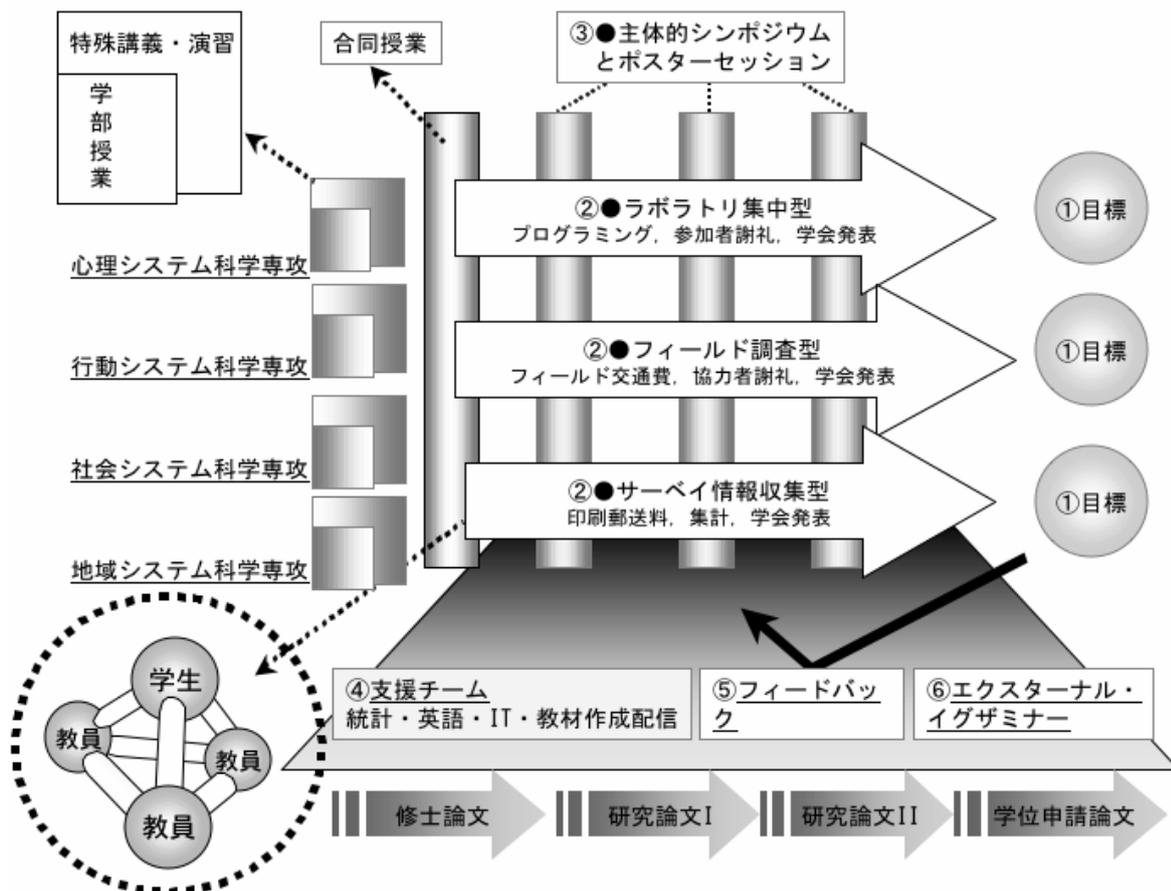
博士前期課程:1年次は、所属する各専修のディシプリンを習得する。加えて、4専修が合同で行う特殊講義(合同授業)により、他領域に関する関心や応用的知識を養う。1年次後半からは、「ラボラトリ集中型」(実験室実験を主とする)、「サーベイ情報収集型」(調査票や衛星画像等の利用による)、「フィールド調査型」(地域に出かけて参与観察や聞き取り調査を行う)のタイプに応じた支援を設け、主体的に研究を進める訓練を積む(混合型も認める)。前記の「研究のスターター」を活用する。

博士後期課程:本研究科においては、博士後期課程では1年目に「研究論文I」を、2年目に「研究論文II」の提出を義務付けている。研究論文I, II, 学位論文で達成すべき研究・活動の質と量を明示化し、目標達成に向けた学生の主体的活動を支援する。

概念図には、以下の①～⑥が含まれる。

- ①**目標の明示化:**アプローチのタイプに応じ、標準的な目標を実験・調査の質・量等の形で明示する。
- ②**学生による主体的な研究の支援(主体的研究支援):**3人の教員によるサポート体制のもとで、タイプごとに、学生による主体的な研究の立案、遂行、論文作成、国際会議での発表等を指導・支援する。
- ③**学生による主体的なシンポジウム・ポスターセッション開催のための支援(主体的シンポジウム・ポスターセッション支援):**教員のサポート体制のもとで、学生が主体的にシンポジウム、ポスターセッションを行う。国内外の研究者や院生との交流、フィードバックの機会を高める。

これらの活動は、④**支援チーム**(統計、英語、データベースの構築・管理、教材の作成配信等の支援を行う)、⑤**フィードバック**(年度末に、学生の学位論文達成度に対し組織的なフィードバックを与える)、⑥**エクスターナル・イグザミナー**(外部ピア研究者によるプログラムの評価であり、学生への面接も行う)によって支えられる。なお、●は学生の主体的活動・参加を、破線の円の内部は教員による学生のサポート体制を表す。



<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、「人間・社会の問題に対し、「実証的アプローチ」をとることができる能力の育成」を専攻の目標とし、それに沿った教育課程が適切な教員配置の下に編成されており、また多様な大学院生に対する支援体制の整備、定期的な大学院生による直接評価を基にした自己点検・評価の実施や、国内外の複数の専門研究者による外部評価の実施、多様な手法による国内外への積極的な情報提供体制の整備など、専攻運営体制が充実している点は、高く評価できるが、専攻内の専任教員の協力体制については、更なる具体化と工夫が望まれる。

教育プログラムについては、実証的アプローチを「ラボラトリ集中型」、「サーベイ情報収集型」、「フィールド調査型」の3つのタイプに分け、それぞれに応じた教育を展開しようという発想は優れているが、多様な取組を効果的に推進するための体制等については、実現性の面から更なる工夫が望まれる。